

に示す形状や内部形態の特徴を主とし、前報と同じ要素を目標にすることによって、それぞれを分類することは可能であると考えられる。

頁数の関係で (6) 報に収載予定の材料 (22), (23), (24) の表皮表面視の Plate をここに入れ、(21) の油室放射断面の顕微鏡写真の Plate とアルベドを解離した図を (6) 報に掲げる。

### Summary

Pericarps of (17) *Citrus junos* Sieb. ex Tanaka, (18) *C. sudachi* Hort. ex Shirai, (19) *C. ujukitsu* Hort. ex Tanaka, (20) *C. tamurana* Hort. ex Takahashi, (21) *C. sulcata* Hort. ex Takahashi were studied.

### ○高等植物分布資料 (17) (p. 326 よりつづく)

7) ヌマトラノオ *Lysimachia Fortunei* Maxim. 1958 年 3 月 23 日、島の中部、石原田の路傍小溝で採集、その後上床の原野湿地でもかなりの個体数を見つけた。

8) ホソバヤブコウジ *Ardisia japonica* Blume var. *angusta* Makino et Nemoto 安満岳原生林の樹下に小群落を作る。1959 年 8 月 15 日初見。葉巾 2 cm, 葉長 5 cm 位のものが最も多い。

9) ネジキ *Iyonia ovalifolia* var. *elliptica* (Sieb. et Zucc.) Hand.-Mazz. 1959 年 6 月 22 日、安満岳南麓林縁で採集。

10) ケジャク *Anthriscus nemorosa* Sprengel var. *hirtifructus* Ohwi 1959 年 4 月 17 日、島の北部千光寺付近の路傍陰地で採集。母種と混生している。

11) ウド *Aralia cordata* Thunb. 1951 年 9 月 14 日 志々伎で採集。林縁で時々見かける。

12) イチビ *Abutilon Avicennae* Gaertn. 1956 年 8 月 4 日、島の南部船越付近で採集。路傍、荒地、休閑畑に自生状態のものをたまに見る程度。

13) キケマン *Corydalis heterocarpa* Sieb. et Zucc. var. *japonica* (Fr. et Sav.) Ohwi 島を二分して、北部にはツクシキケマン、南部には本種を生ずる。何れも海岸付近にやや普通。

### ○ *Bryum ramentosum* Dixon の正体 (越智春美) Harumi OCHI: On the status of *Bryum ramentosum* Dix. reported from Manchuria.

H. N. Dixon (1934) が満洲産のセン類を報告した中に、カサゴケ科のものとしては

次の5種が含まれている：*Bryum argenteum* Hedw., *B. ramentosum* Dix., *B. cernuum* (Hedw.) Lindb., *B. pseudotriquetrum* (Hedw.) Schwaegr. および *B. roseum* (Hedw.) BSG (*Rhodobryum roseum* Limpr. として報告)。拙著 “A revision of the Bryaceae in Japan.....” (1959) においては、分布を論ずるのに不可欠と思われる場合を除いては、満洲産のものはわざと除外する方針をとったので、上記5種のうち *B. cernuum* のみを引用するに止めた。

東京科学博物館所蔵の笹岡コレクション中には、小林勝氏採集の Dixon によって引用せられたとみなすべき標本があり、中でも当時新種として記載された *B. ramentosum* としてある標本のラベルには co-typus と明記されており、他のデータや標本の特長から判断しても、それが原標本とみなされるものである。未だセン類フロラの充分明らかでない満洲へは当分行けそうもないことを考えると、同氏の標本は現在では実に貴重なものであろう。ところが、*B. ramentosum* なるものは *B. pseudotriquetrum* の異名に落されるべきものと思われる。その標本は葉腋に褐色の分岐した附属糸（しばしば無性芽と呼ばれ、Dixon もそのように書いている。無性繁殖に役立つかどうかはよくわからないが、球形や芽のような形のものとは区別した方がよいように思われるので、敢てここでは無性芽とはしなかった）をつける型のものであるから、Brotherus (1919-20) が *B. ventricosum* var. *vestitum* としたものにあたる。この型のものが変種として特に区別する必要のないことは、すでに筆者（前出 1959）が論じたところである。原記載でのべた他の *B. pseudotriquetrum* との相異点すなわち、あまり巻かず又広く発達した縁辺細胞列を有する葉縁、しばしば鋭い鋸歯を有する葉尖、全長にわたって肋が赤い等も *B. pseudotriquetrum* の変異性の著しいことから判断すれば、特に重要な相異とは思えない。*B. argenteum*, *B. pseudotriquetrum* および *B. roseum* は正しい同定と思われる。

渡辺良象氏からの私信によれば、小林勝氏は非常にお元気で、満洲から引揚げられてから御郷里で奉職しておられたが、今は職を退かれて仙台で余生を楽しんで居られるとの由。同氏は *B. ramentosum* の図解を旅順師範紀要に発表せられたとの事であるが、筆者は残念ながらその図解には未だ接していない。終りに、標本を検討する便宜を与えられた小林義雄博士に深謝の意を表する。

*Bryum ramentosum* Dix. seems to be merely a form very similar to *B. ventricosum* var. *vestitum* Broth., which has already been reduced as a synonym to *B. pseudotriquetrum* (Hedw.) Schwaegr. by H. Ochi (1959).

***Bryum pseudotriquetrum*** (Hedw.) Schwaegr., Suppl. 1 (2): 110. 1816—*Bryum ramentosum* Dix., Rev. Bryol. et Lichénol. 7: 108. 1934. Syn. nov.

Specimen examined. Manchuria: Mt. Hôwô, Prov. Ryônei (M. Kobayashi, Aug. 4, 1930; in Herb. Sasaoka, No. 3897—isotype of *B. ramentosum*, in TNS).